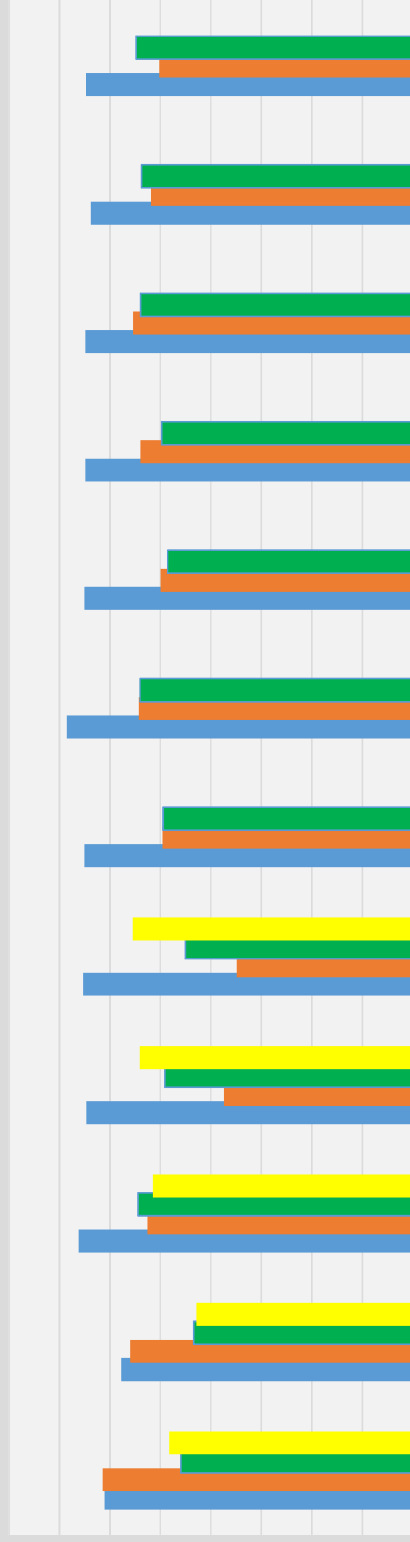
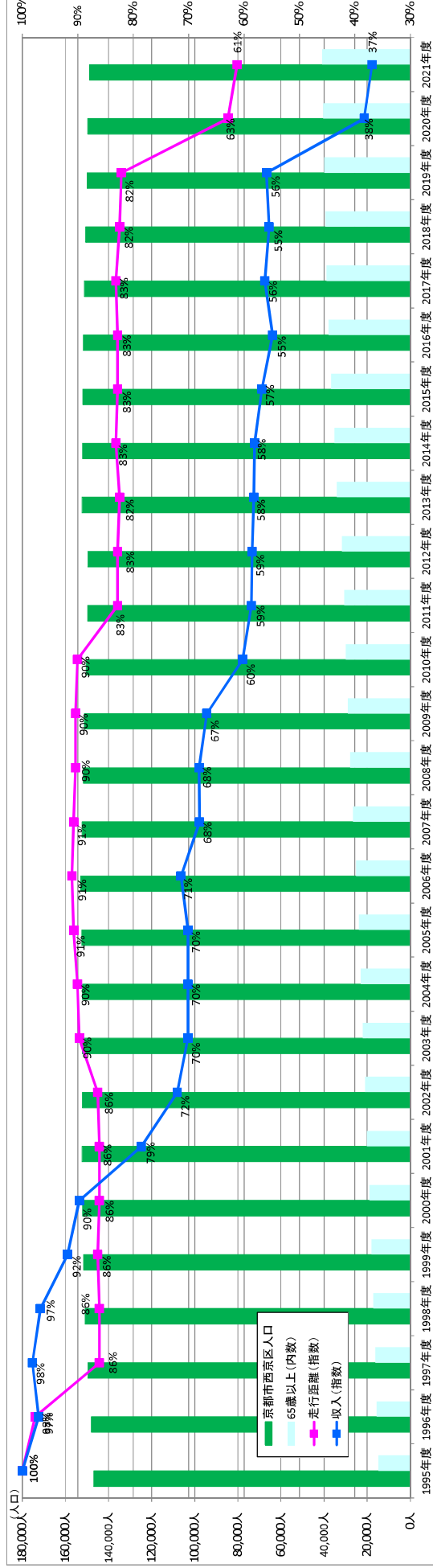


阪急バス一般路線輸送実績（全路線：運賃収入）



	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
2019	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
2020	100.6%	97.0%	79.5%	58.0%	53.4%	76.3%	79.1%	76.9%	83.1%	85.5%	81.4%	77.6%
2021	75.3%	75.2%	82.3%	76.0%	69.0%	76.1%	78.8%	74.7%	76.7%	83.2%	84.2%	84.6%
2022	79.0%	74.2%	77.8%	83.7%	84.9%							

大原野線 輸送実績



令和4年7月

株式会社ヤサカバス

洛西地区 月別収入比較表								
		令和元年度		令和2年度		令和3年度		令和4年度
10月	平成30年	100	令和元年	121.2	令和2年	92.5	令和3年	85.0
11月		100		84.0		75.7		77.7
12月		100		100.9		86.7		84.5
1月	令和元年	100	令和2年	105.0	令和3年	87.1	令和4年	93.0
2月		100		97.8		72.7		74.4
3月		100		93.1		80.5		78.6
4月		100		68.7		87.4		85.0
5月		100		45.1		69.3		79.9
6月		100		71.6		74.0		84.8
7月		100		87.0		85.4		
8月		100		75.6		75.8		
9月		100		79.1		73.6		
合計		100		84.7		80.1		

令和元年度(平成30年9月21日から令和元年9月20日)の各月の収入を100とした場合の増減表

太線内は、コロナ感染症の影響を受けた期間

(広報資料)

令和4年6月10日
京都市交通局

〔担当：企画総務部企画調査課〕
電話：075-863-5094

市バス・地下鉄のお客様数について（令和3年度）

この度、令和3年度の市バス・地下鉄のお客様数（速報値）がまとまりましたので、お知らせします。

市バス・地下鉄事業は、過去、厳しい経営状況を改善するため、数次にわたる経営健全化に取り組み、大幅に経費を削減するとともに、増収・増客に努めた結果、近年では両事業とも黒字を計上するなど大きく経営改善を果たしてまいりました。

しかし、令和2年2月以降、新型コロナウイルス感染症の影響により、市バス・地下鉄事業を取り巻く状況が大きく変わり、令和2年度のお客様数は、令和元年度と比べ、両事業で1日当たり▲24万人以上減少し、年間150億円もの運賃収入が激減するという、極めて厳しい経営状況に直面しました。

令和3年度は、徹底した緊縮予算の中で、お客様の安心・安全を最優先に、新型コロナウイルス感染症対策を徹底したうえで、事業運営に取り組んだ結果、1日当たりのお客様数は、前年度と比較すると、両事業で4万8千人の増加となりましたが、度重なる「緊急事態宣言」の発出や「まん延防止等重点措置」の適用もあり、コロナ前（令和元年度）と比較すると、いまだ▲19万5千人と大きく減少しています。

運賃収入も▲120億円の減収となり、2年間で約▲270億円の大幅な減収となる厳しい状況です。

<令和3年度の1日当たりのお客様数及び運賃収入>

- ・市バス 「268千人／日」, 「152億円」
- ・地下鉄 「295千人／日」, 「186億円」
- ・両事業合計 「563千人／日」, 「338億円」

<新型コロナウイルス感染症の影響を強く受けていた、前年度(令和2年度)比較>

- ・市バス 「+2万0千人増(+8.1%)」, 「+12億4千万円」
- ・地下鉄 「+2万8千人増(+10.4%)」, 「+16億6千万円」
- ・両事業合計 「+4万8千人増(+9.3%)」, 「+29億0千万円」

<新型コロナウイルス感染症の流行前である令和元年度比較>

- ・市バス 「▲9万0千人減(▲25.1%)」, 「▲48億1千万円」
- ・地下鉄 「▲10万5千人減(▲26.2%)」, 「▲71億8千万円」
- ・両事業合計 「▲19万5千人減(▲25.7%)」, 「▲119億9千万円」

両事業の経営は、令和2年度に引き続き、極めて厳しい状況です。

○ 市バス・地下鉄1日当たりのお客様数（速報値）

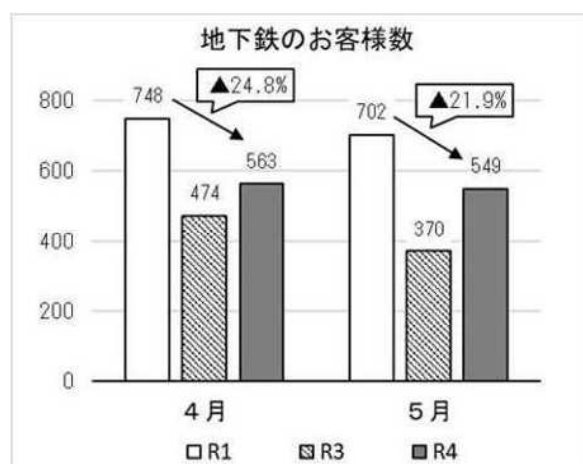
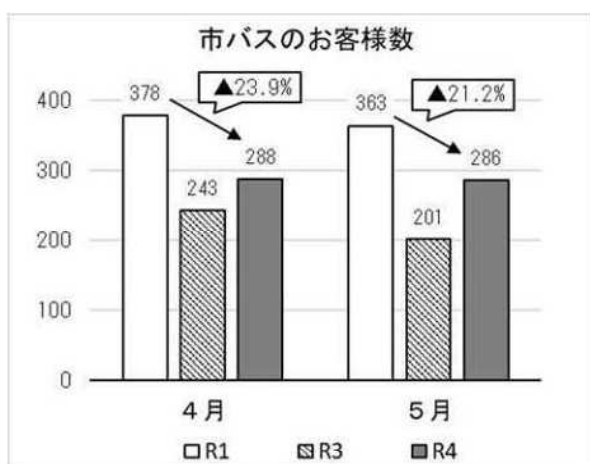
	令和元年度	令和2年度	令和3年度	R3/R2 比	R3/R1 比
市バス	35万7千人	24万8千人	26万8千人	+8.1%	▲25.1%
地下鉄	40万0千人	26万7千人	29万5千人	+10.4%	▲26.2%
両事業合計	75万7千人	51万5千人	56万3千人	+9.3%	▲25.7%

《令和４年度のお客様の状況》

令和４年度に入ってから新型コロナウイルスの新規感染者数は、横ばいで推移しており、桜のシーズンや、３年振りに行動制限がなかったGWには、市内各地で観光のお客様による賑わいが見られたことから、４月、５月のお客様数は、市バス・地下鉄ともに、令和３年度と比較すると増加しましたが、コロナ前（令和元年度）との比較では、４月は約２５％の減少、５月は約２０％の減少となり、依然として大幅な減少が続いています。

（参考）令和４年４月、５月のお客様数

（市バスは乗客計数器、地下鉄は改札通過乗降人員に基づく速報値）



1 令和3年度のお客様の動向

年度当初から新型コロナウイルス感染症の影響を受け、「緊急事態宣言」の発出に伴う外出自粛等の行動制限が求められていた4月～6月及び9月は、お客様数が減少し、コロナ前（令和元年度）との比較で▲30%を超える状況となりました。

10月～12月は、新型コロナウイルス感染者の減少もあり、市内を訪れる観光のお客様による賑わいが見られましたが、令和3年度の中でコロナ前（令和元年度）比較との減少率が最も小さかった12月でも、お客様数は約▲15%となりました。

1月以降は、再び新型コロナウイルス感染者の増加に伴う「まん延防止等重点措置」の適用を受け、1月～3月のお客様数が、コロナ前（令和元年度、ただし2月、3月は平成30年度）との比較で▲20%を超える状況となりました。

その結果、令和3年度の1日当たりのお客様数は、新型コロナウイルス感染症の影響を強く受けていた前年度と比較すると、市バスが+2万0千人（+8.1%）、地下鉄が+2万8千人（+10.4%）の増加となりましたが、コロナ前（令和元年度）との比較では、市バスが▲9万0千人（▲25.1%）、地下鉄が▲10万5千人（▲26.2%）の減少となり、大幅な減少が続いています。

○「定期外」のお客様数（1日当たり）

「緊急事態宣言」の発出期間中に不要不急の外出・移動の自粛が強く求められるなど、お客様数が激減していた前年度と比較すると、市バスが+15.4%、地下鉄が+10.9%の増加となりましたが、コロナ前（令和元年度）との比較では、観光利用のお客様の減少による影響がまだまだ大きく、市バスが▲39.0%、地下鉄が▲36.6%の減少となりました。

○「定期券利用」のお客様数（1日当たり）

通勤定期は、令和2年2月以降、テレワークの浸透により減少したお客様数が回復しておらず、対前年度比では、市バスが▲0.3%、地下鉄が▲1.1%の減少、コロナ前（令和元年度）との比較では市バスが▲12.9%、地下鉄が▲12.2%の減少となりました。

一方、通学定期（大学）のお客様数は、休校やオンライン授業の影響により、御利用が大きく落ち込んだ前年度と比較すると、市バスが+76.7%、地下鉄が+79.3%の増加となりましたが、令和3年度も大学の授業形態が、コロナ前の状態には戻っておらず、コロナ前（令和元年度）との比較では、市バスが▲45.3%、地下鉄が▲33.9%の減少となりました。

[市バス]

注) 内訳は主なものを記載

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	R3/R2 比	R3/R1 比
市バス全体	35万7千人	24万8千人	26万8千人	+8.1%	▲25.1%
定期外	18万7千人	9万9千人	11万4千人	+15.4%	▲39.0%
定期	9万6千人	7万2千人	7万8千人	+8.3%	▲19.2%
通勤	7万2千人	6万3千人	6万2千人	▲0.3%	▲12.9%
通学（大学）	1万7千人	5千人	9千人	+76.7%	▲45.3%

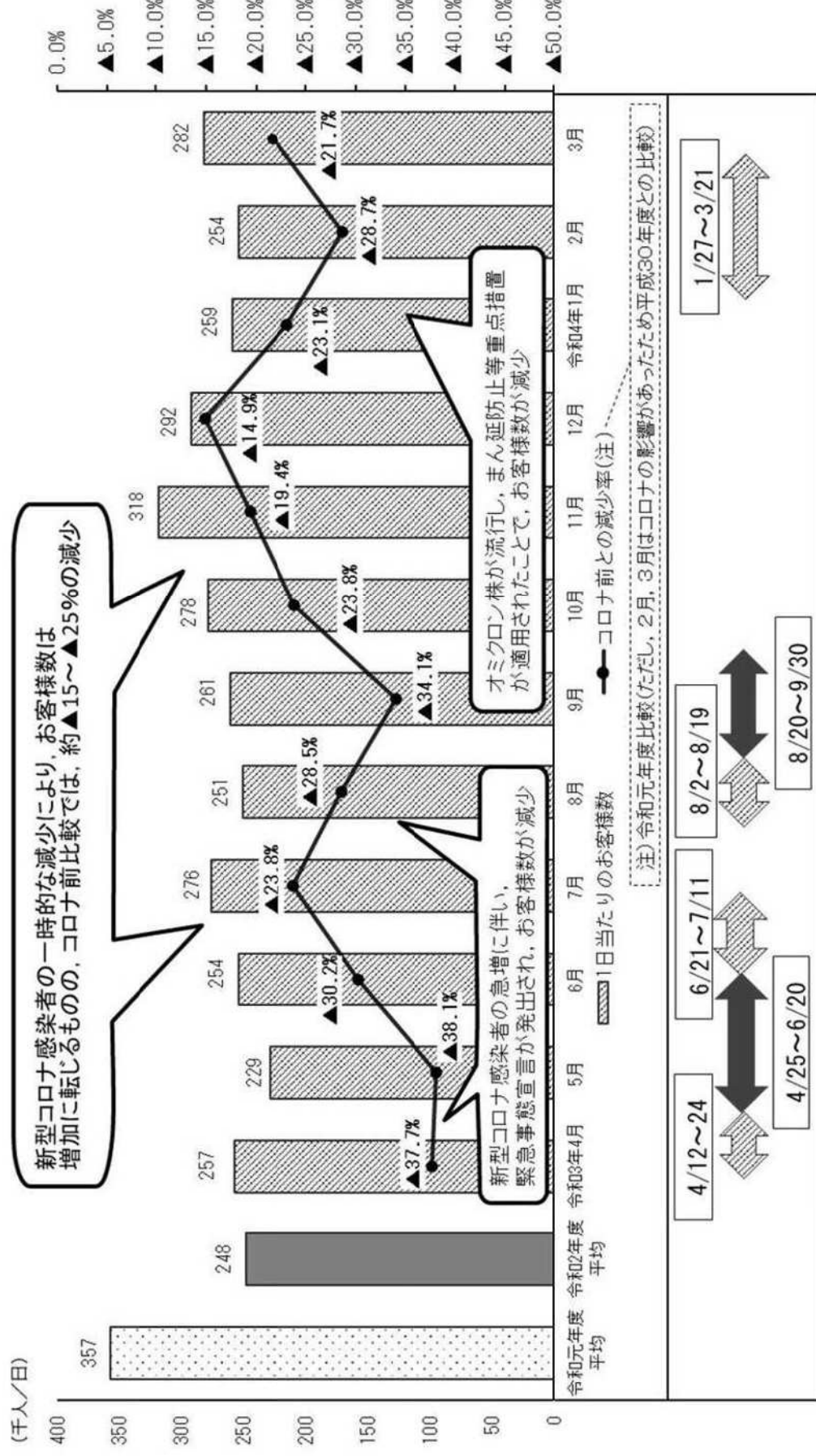
[地下鉄]

注) 内訳は主なものを記載

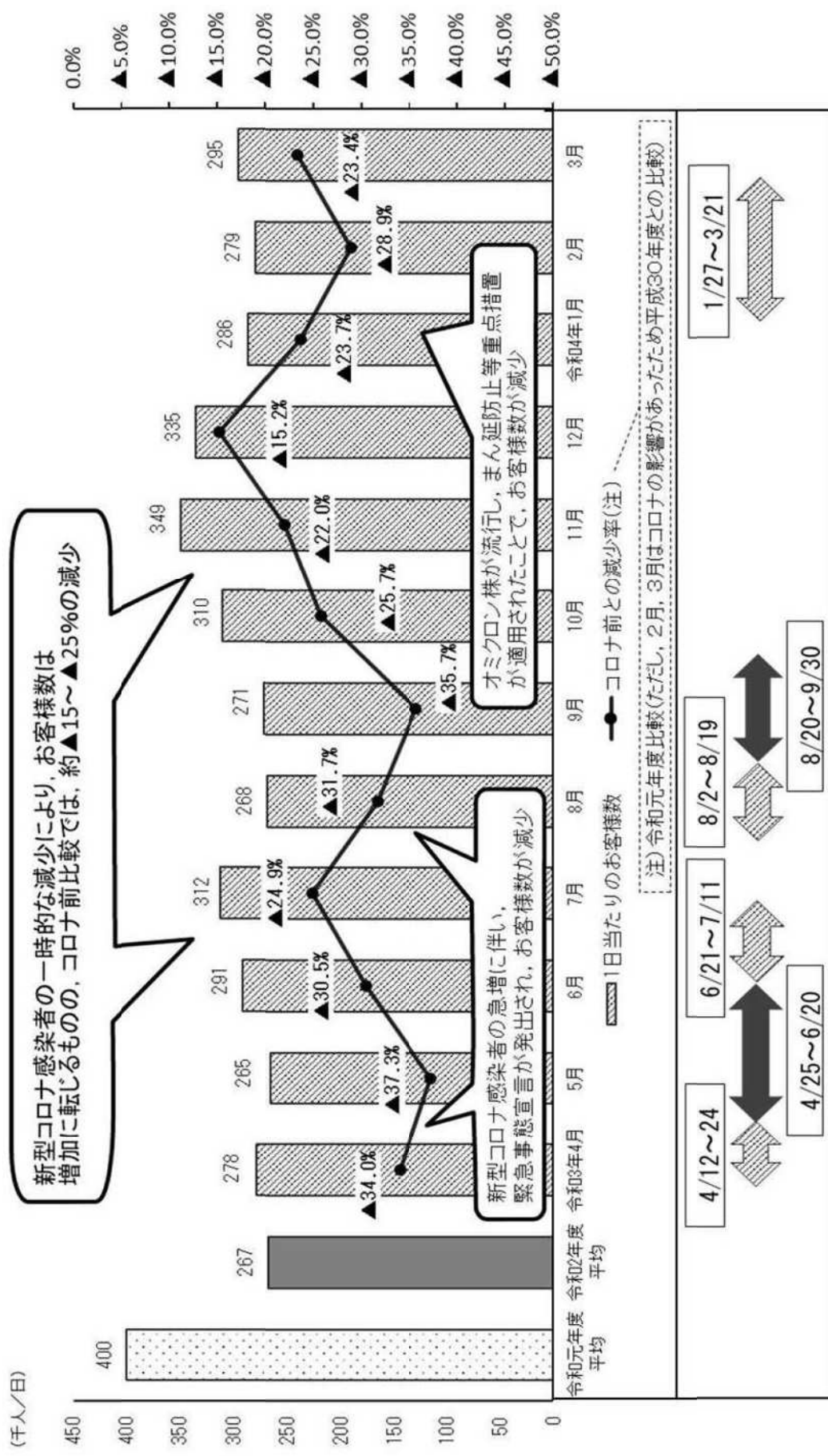
	令和元年度	令和2年度	令和3年度	R3/R2 比	R3/R1 比
地下鉄全体	40万0千人	26万7千人	29万5千人	+10.4%	▲26.2%
定期外	20万8千人	11万9千人	13万2千人	+10.9%	▲36.6%
定期	16万8千人	12万4千人	13万9千人	+12.2%	▲17.4%
通勤	10万9千人	9万6千人	9万5千人	▲1.1%	▲12.2%
通学（大学）	4万0千人	1万5千人	2万7千人	+79.3%	▲33.9%

《1日当たりのお客様数の推移とコロナ前との減少率》

〔市バス〕



〔地下鉄〕



※ 緊急事態宣言、...まん延防止等重点措置

《各月のお客様数及び対元年度、対2年度の増減率》

(単位：千人／日)

	市バス			地下鉄			両事業		
		R3/R2比	R3/R1比		R3/R2比	R3/R1比		R3/R2比	R3/R1比
4月	257	+ 35.7%	▲37.7%	278	+ 37.2%	▲34.0%	535	+ 36.5%	▲35.8%
5月	229	+ 25.9%	▲38.1%	265	+ 47.1%	▲37.3%	494	+ 36.5%	▲37.6%
6月	254	+ 7.2%	▲30.2%	291	+ 13.9%	▲30.5%	545	+ 10.7%	▲30.3%
7月	276	+ 9.8%	▲23.8%	312	+ 17.0%	▲24.9%	588	+ 13.5%	▲24.4%
8月	251	+ 4.5%	▲28.5%	268	+ 3.3%	▲31.7%	520	+ 3.9%	▲30.2%
9月	261	▲5.3%	▲34.1%	271	▲7.8%	▲35.7%	532	▲6.6%	▲34.9%
10月	278	▲1.2%	▲23.8%	310	▲1.0%	▲25.7%	588	▲1.1%	▲24.8%
11月	318	+ 0.7%	▲19.4%	349	+ 2.4%	▲22.0%	667	+ 1.6%	▲20.8%
12月	292	+ 12.6%	▲14.9%	335	+ 14.7%	▲15.2%	626	+ 13.7%	▲15.0%
1月	259	+ 12.4%	▲23.1%	286	+ 13.1%	▲23.7%	546	+ 12.8%	▲23.4%
2月	254	+ 0.8%	▲21.0% ▲28.7%	279	+ 0.5%	▲26.0% ▲28.9%	533	+ 0.6%	▲23.7% ▲28.8%
3月	282	+9.1%	+2.6% ▲21.7%	295	+ 7.5%	▲0.9% ▲23.4%	577	+8.3%	+0.8% ▲22.6%
年平均	268	+ 8.1%	▲25.1%	295	+ 10.4%	▲26.2%	563	+ 9.3%	▲25.7%

※R3.2月、3月の下段網掛けはH30年度比

2 令和3年度の運賃収入（速報値）

(単位：百万円【税抜】)

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	減収額計
市バス	20,015	13,960	15,202	—
前年度比較	—	▲6,055	+1,242 (▲4,813)	▲10,868
地下鉄	25,778	16,942	18,603	—
前年度比較	—	▲8,836	+1,661 (▲7,175)	▲16,011
両事業合計	45,793	30,902	33,805	—
前年度比較	—	▲14,891	+2,903 (▲11,988)	▲26,879

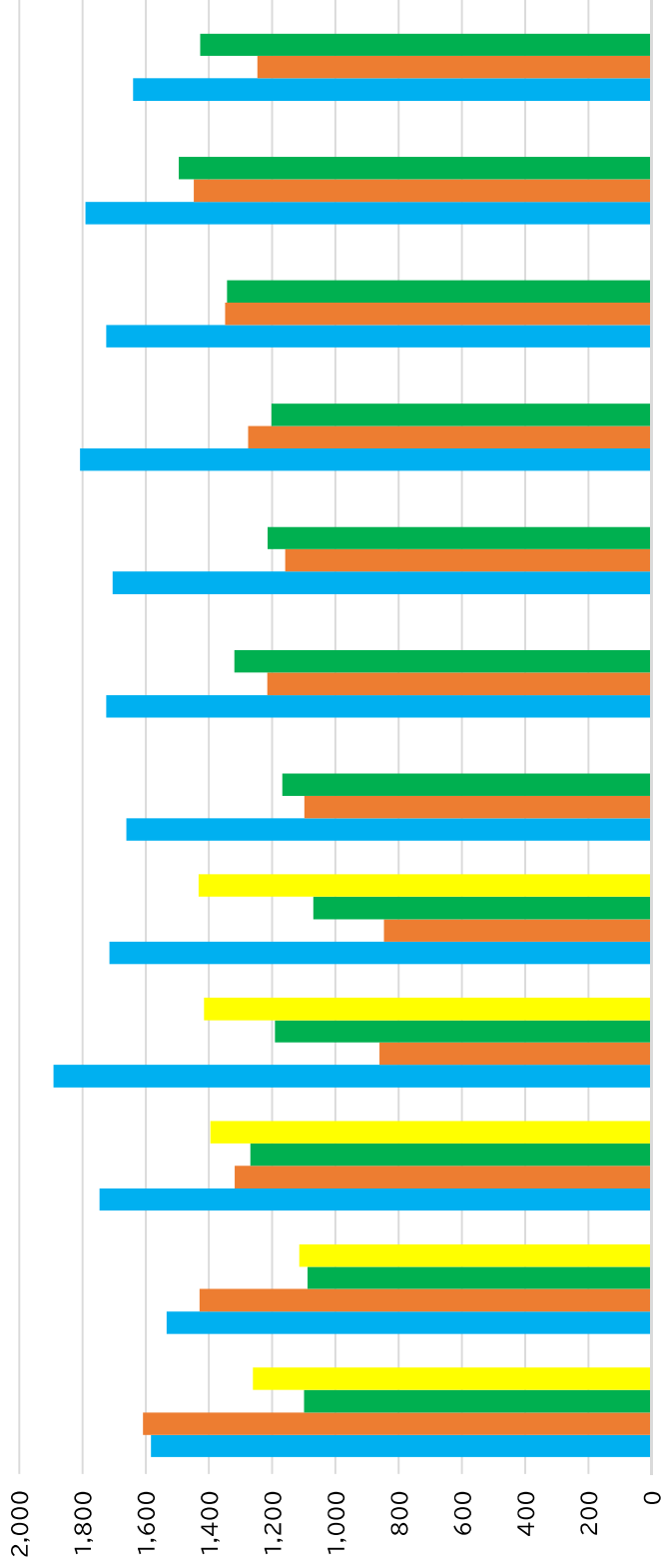
※（ ）は元年度比較

- 令和3年度の運賃収入は、昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症の影響によるお客様の減少により、大きく落ち込んでいます。
- 新型コロナウイルス感染症の影響を強く受けていた前年度と比較すると、市バスは+12億42百万円、地下鉄は+16億61百万円の増加となりましたが、コロナ前（令和元年度）との比較では、市バスは▲48億13百万円、地下鉄は▲71億75百万円で、両事業合計で▲119億88百万円の減収、1日当たり約▲33百万円の減収となりました。
- 令和2年度の減収額と合わせると、市バスが▲108億68百万円、地下鉄が▲160億11百万円で、両事業合計は▲268億79百万円となり、極めて厳しい経営状況となっています。

市バスの運賃収入(全路線)

※2022年4月以降は速報値

(単位:百万円、税抜)



	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
2019	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
2020	101.6%	93.2%	75.4%	45.5%	49.4%	66.2%	70.5%	68.0%	70.7%	78.2%	80.8%	76.0%
2021	69.5%	70.9%	72.6%	63.0%	62.4%	70.3%	76.5%	71.3%	66.5%	77.9%	83.5%	87.1%
2022	79.7%	72.6%	79.9%	74.8%	83.6%							

2022年3月期 決算説明会



2022年5月2日
西日本旅客鉄道株式会社

22.3期決算・23.3期業績予想 ハイライト

- **22.3期**は、第4四半期においてオミクロン株への新規感染が急拡大した影響を受け、営業収益は通期計画を下回った一方、**計画を上回るコスト削減**を進めた結果、各**損益**は想定**のレンジ内**に。
- **23.3期**は、連結営業利益300億円、連結当期純利益585億円と**3期ぶりの黒字**を目論む。時期調整してきた修繕の実施や物価上昇、収入連動費用の増などが見込まれるところ、単体の**構造的コスト削減を▲200億円**まで拡大するなど、引き続き、コスト抑制に努める。

	21.3期 通期実績	22.3期 通期実績	対前年		対業績予想		23.3期 通期予想		対前年		対中計見直し	
			差額	比率	差額	比率			差額	比率		比率
【連結】												
営業収益	9,200	10,311	+1,110	112.1%	▲208 ～▲578	98.0% ～94.7%	13,090		+2,778	127.0%		90.3%
営業費用	11,655	11,501	▲153	98.7%	▲308 ～▲328	97.4% ～97.2%	12,790		+1,288	111.2%		97.6%
営業利益/損失(▲)	▲2,455	▲1,190	+1,264	-	+99 ～▲250	-	300		+1,490	-		21.4%
経常利益/損失(▲)	▲2,573	▲1,210	+1,362	-	+204 ～▲145	-	135		+1,345	-		10.8%
親会社株主に帰属する 当期純利益/損失(▲)	▲2,331	▲1,131	+1,199	-	+33 ～▲316	-	585		+1,716	-		73.1%
EBITDA	▲708	429	+1,137	-	▲79 ～▲271	-	1,930		+1,500	449.9%		58.5%
【単体】												
運輸収入	4,190	4,876	+686	116.4%	▲113 ～▲443	97.7% ～91.7%	6,730		+1,853	138.0%		86.8%
営業費用	7,406	7,046	▲360	95.1%	▲183	97.5%	7,645		+598	108.5%		97.4%

*「対中計見直し」の比率は「収益認識に関する会計基準」の影響を加味していません。

22.3期決算・23.3期業績予想 運輸業

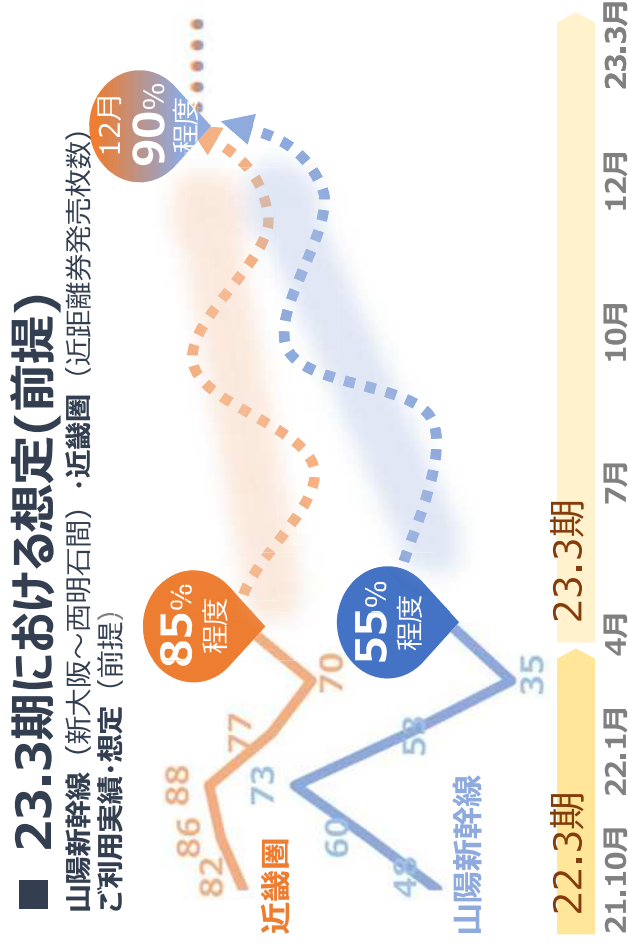


■ 営業収益		(億円)
22.3期実績	23.3期予想	
5,441	7,390	
うち単体運輸収入		
4,876	6,730	
2,116	3,390	
2,107	2,510	
653	830	

■ 営業利益		(億円)
22.3期実績	23.3期予想	
▲1,443	▲110	

■ EBITDA		(億円)
22.3期実績	23.3期予想	
▲164	1,150	

- ポイント
- 22.3期は、4Qに入りオミクロン株への感染が急拡大した影響等により、運輸収入計画は未達となった。
 - 23.3期は足元の状況（新幹線55%程度、近畿圏85%程度）から、第7波以降の到来も意識しつつ緩やかに回復し、12月末頃にコロナ前の9割に回復すると想定。4



ローカル線

線区別の経営状況に関する情報開示

線区の実態や課題を沿線地域と共有

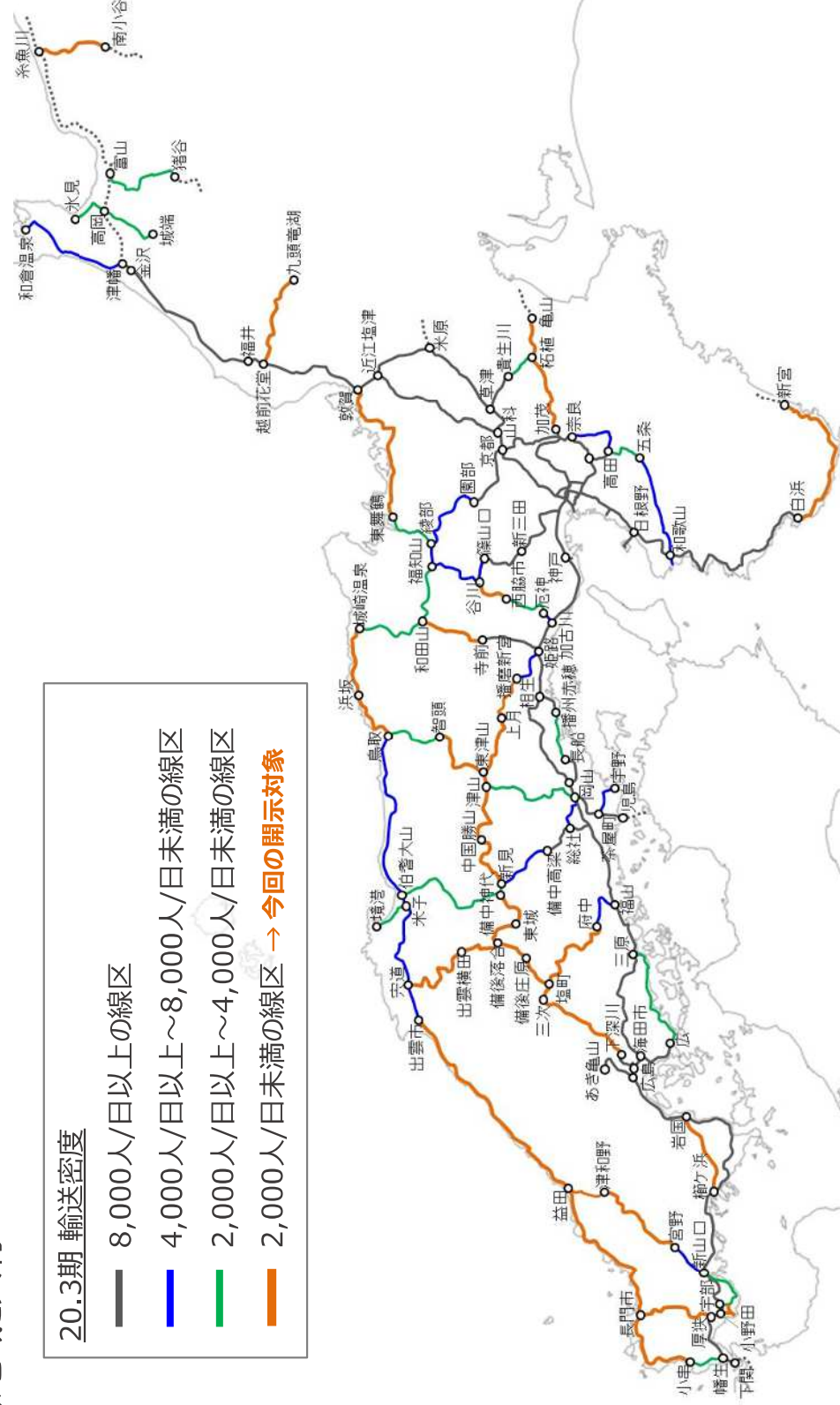
- 輸送密度2,000人/日未満の17路線30線区について、線区別収支率などを開示
- 大量輸送という観点で、鉄道の特性が十分に発揮できていないと考えている線区の実態や課題を沿線地域と共有

今よりもご利用しやすい最適な地域交通体系を地域と共に模索・実現

- ✓ 線区特性の違いや移動ニーズを踏まえ、地域のまちづくりに合わせた、今よりもご利用しやすい最適な地域交通体系を地域と共に創りあげていく

20.3期 輸送密度

- 8,000人/日以上以上の線区
- 4,000人/日以上～8,000人/日未満の線区
- 2,000人/日以上～4,000人/日未満の線区
- 2,000人/日未満の線区 → 今回の開示対象



《都市交通》 鉄道輸送人員（対2018年度同月比較）

■ 鉄道輸送人員（対2018年度同月比較）

